

【 論文 】

旅行記にみる井上円了の観光行動

堀雅通

Abstract:

During his life, Inoue Enryō traveled considerably both inside and outside of Japan, and wrote a travel diary for each of his trips. This paper will explore Enryō's tourist side through these travel diaries.

Pleasure Travel Diaries 『漫遊記』 consist of Enryō's travel diaries from his student days. He recorded travel times and dates, weather, landscapes, and the famous historical spots he visited. He further noted his impressions and feelings regarding the folklore and customs of localities. While the aim of his trips was entirely his own amusement, they also doubled as opportunities for sightseeing and relaxation.

Based on Enryō's diaries that were published during his lifetime, his travels can be divided into two types. The first was his nation-wide lecture tours, which covered a total of 3,578 days. Enryō published records of his lecture tours as concise travel diaries, which were first included in *Philosophy Academy Lecture Records* under the title *The Dean's Lecture Tour Diary* 「館主巡回日記」. After resigning from the Philosophy Academy, he published diaries as the sixteen volumes '*South by Boat – North on Horse*' *Collection* 『南船北馬集』. The second type was Enryō's three overseas inspection tours. The first two tours were primarily in Europe and the United States, and for the third he went all the way to the southern hemisphere.

While he was very busy on those tours and inspections, he managed to enjoy engaging in a variety of tourist activities at the places he went, which ranged from historic spots to hot springs. For Enryō, tourism was, above all, about visiting and

appreciating scenic places, which would often captivate him. His tourism primarily consisted of enjoying pretty scenery, which brought him into contact with nature.

For Enryō, travel was also an opportunity to meet and talk with people, and he renewed relationships with old acquaintances. In all of travels, Enryō also made efforts to spend time with people at his destinations, particularly those affiliated with the Philosophy Academy / Toyo University. He also gathered information on the folklore and customs of various places and also formed a diverse network through his interactions. Through his tourism, he acquired a wide-ranging perspective and a comparative way of thinking and seeing things. This influenced his cultural comparisons, civilizational theories, and intellectual formation.

(Keywords: Travel, Travel Diary, Tourism, Nation-wide Lecture Tour)

1. はじめに

井上円了は、その生涯に、国内外、実に多くの旅行をし、そのつど旅行記を著わしている。円了の旅行は、国内については、「全国巡回講演」（以下「巡講」）、海外については、各国の政治・宗教・教育制度の視察を目的としていた。こうした旅行は、旅行記にみる限り、いずれも本来の旅行目的に観光の要素が加わった、いわゆる「兼観光」（旅行）だった¹。

本論は、そのような井上円了の旅行内容を、旅行記から分析し、円了の観光行動を考察する。これまでも円了の旅行記を分析した研究は見られたが、観光的な視点から考察を加えたものはなかった。円了の旅行に観光的要素を認めるにしても、それはあくまでも付随的なものと捉えられてきた。本論は、しかし、円了の旅行が、「触れ合い」「学び」「遊ぶ」という（1995年観光政策審議会答申が定義する）「観光」の要素を十分兼ね備えた観光旅行であったことを明らかにする。

円了の旅行記は国内と海外に大別される。国内は『漫遊記』『館主巡回日記』『南船北馬集』であり、海外は『欧米各国政教日記』『西航日録』『南半球五万哩』である。本論は、これら旅行記を総称して「円了旅行記」とする²。以下、各旅行記の内容を検証しながら、井上円了の観光行動を考察する。具体的には、旅行の目的、行程、旅行中関心をもった事物・事柄を分析する。換言すれば、円了はどのような旅行をしたか。旅行中どのようなものに関心を持ったか。どのような行動をとったか

を検証する。

2. 国内旅行記にみる観光行動

2. 1 学生時代の旅行記—『漫遊記』—

井上円了は、学生時代、井上甫水著『漫遊記』と題する自筆本の旅行記を遺していた³。『漫遊記』は、旅行の日時、天候、行程、利用交通手段、訪問地の風景、風俗・民俗、名所旧跡などの印象・所感を漢文訓読体で綴ったもので、2編（第一編・第二編）に分かれ、「西京紀行」、「筑波紀行」など、それぞれ10の小旅行記からなっている。著名は「井上甫水」だが、むろん円了自身である。第一編の「漫遊」の時期は、1877年（明治10）6月から1881年（明治14）9月まで、経歴でいえば新潟学校第一分校（旧長岡洋学校）を辞して京都東本願寺の教師教校英学科に入学、東本願寺留学生として上京、東京大学予備門に入学し、卒業するまでの4年間である。第二編の「漫遊」の時期は、東京大学時代、すなわち1881年（明治14）9月、東京大学文学部に入学、1885年（明治18）7月、同大哲学科を卒業するまでの4年間である。

『漫遊記』の旅行目的・内容は、「漫遊」という題名からも、当初から観光的要素を十分持ち合わせていた⁴。すなわち『漫遊記』の旅行は「観光」（＝漫遊）であり、観光が旅行の主目的であった。「西京紀行」も東本願寺の命による上洛だが、円了自身にとっては観光旅行そのものだったといつてよい。

旅行中、円了は行く先々で様々な風物を見聞するが、心にとまった風景、関心をもった民俗・風俗の印象や所感を、自作の漢詩を織り込みながら、簡潔な漢文訓読体で記している。漢詩の挿入は後年の旅行記にも見られ、円了旅行記の特徴の一つとなっている⁵。筆致は極めて自由で、このようなスタイルは、その後の旅行記にも踏襲されていく。

旅行はいずれも長期休暇（春・夏・冬休み）を利用して行われた。円了は休暇に入るとほとんど旅に出た。旅行はたいてい友人と一緒にだったが、ふいに思い立っての単独行もあった（1880年4月の銚子行き）。江の島・鎌倉、熱海はよほど気に入ったのか複数回行っている。箱根には2ヶ月滞在した。円了は富士山に憧れた。生まれて初めて見た富士山は神戸から横浜へ向かう船の中だった。以来、しばしば富

士山を目にし、その姿を写している。例えば、江の島から見た富士山は、「富嶽銀ヲ輝カス其妙筆硯ヲ以テ尽クシ難シ」（「江島紀行」 p.98）だった。箱根滞在中の1881年（明治14）夏には登頂を果たした。その時の興奮を次のように記している。「湖上ヲ望メハ独り富嶽ノ蒼然トシテ碧霄ノ間ニ聳ユルヲ見ル顧テ昨遊ヲ憶ヘハ茫トシテ只夢ノ如シ」（「富士登行」 p.113）。日光霊廟の「美麗」「彩光」にも目を奪われた。「本社ヲ礼拝シ霊廟ニ昇ル其美麗心ヲ奪ヒ其彩光目ヲ瞠シ称スルニ語ナク筆スルニ字ナシ」（「日光并奥州紀行」 p.101）。

円了は学生時代からよく温泉に行った。年末年始を温泉で過ごすこともあった。「浴場ニアリテ年ヲ送り……熱海ニ遊寓スルコト殆ト二週間ニシテ」（「熱海紀行」 p.104）東京へ帰った。旅行記には学業から解放された時の気持ちが素直に表わされている。「七月校業已ニ終リヲ告ケ……余輩ノ如キモ始テ校牢ノ縛ヲ脱シ鞭撻ノ苦境ヲ去リ蠖屈(ママ)ヲ伸フルコトヲ得タル」（「寓居記事」 p.106）。「閑地ヲ探テ学苦ヲ除カント欲シ同窓相伴ヒ熱海ニ遊フ」（「再遊熱海記」 p.107）。友人と深夜、二子玉川界限を徘徊し、解放的な喜びを謳歌したこともある（「寓居記事」参照）。『漫遊記』には若き日の円了の生き生きとした学生生活の一端が窺われる。また円了が多くの学友たちと自由闊達に交際していたこともわかる。

旅行中、円了は行く先々の主要な神社仏閣は、必ずこれを参拝している。「西京紀行」では、長野「善光寺ノ開帳ヲ拝シ」（「西京紀行」 p.94）、京都に着くや、まもなく市内の著名な寺社を参拝、京都滞在のほぼ1年間に多くの名所旧跡を回っている。「凡ソ余平安客舎ニ寓スル殆ト一年ニシテ其間拝観訪尋スル霊地旧蹟一々掲クルニ違アラス」（「西京紀行」 p.97）。「江島紀行」でも江の島に着くや、まず島内の江島神社と三社（辺津宮・中津宮・奥津宮）を参拝した。「旅装ヲ解テ廟ニ詣ス三社ヲ巡拝」（「江島紀行」 p.98）。その他、鎌倉、日光、銚子、筑波、秩父など訪問地各所の寺社をこまめに参詣している。東京にいても主要な社寺はこれを全て参拝、記録に留めている（「府下遊処」参照）。

名所旧跡はおおむね通覧する程度で特段深入りすることはなかったが、著名な歴史的事跡に対しては時に関心を寄せることもあった。例えば、日光東照宮、会津の戊辰戦争などについては、その想いを幾分詳しく記している。また蝉、蛙、月といった後年の旅行記にしばしば登場する事物への関心も（蛙を除き）『漫遊記』に確認することができる（本論第4節参照）。なお理由は不明だが横須賀の造船所を2回見学している。「造船所ヲ一見」（「江島紀行」 p.99）、「横須賀ニ至テ造船所ヲ一覽」（「相

州遊記」p.107)。「房総漫遊」ではたまたま友人と小学校で講演する機会があった。「村内ノ小学校ニ到リ學術演説会ヲ開ク來聴スルモノ二百余名余輩各々二題ヲ演ス」(「房総漫遊」p.115)。後年の巡講を彷彿させる。

風景賛美も円了旅行記の特徴である。円了は、旅行中、山紫水明に出会うことを最大の「楽しみ」とした。伝統的な名所・景勝も自らその美を確認した。苦しい徒歩旅行も風光明媚に触れることで報われる。「山溪ノ風光耳目ヲ娛マシムルコトアリテ更ニ旅行ノ艱苦ヲ覚エス」(「西京紀行」p.95)。「西京紀行」では木曾の溪谷美が円了の心を捉えた。(木曾の)「山水ノ風景ニ至テハ蓋シ之ヨリ富メルハナシ」(「西京紀行」p.95)。感動した円了は「天然ノ景色固トニ雅ナリ往還ノ人此景ヲ問ハスシテ過ルモノ多シ余景色ノ為メニ之ヲ悲ム」(「西京紀行」p.95)とまで記している。これは後年の以下のような記述を想起させる。(熊野の景観美を発見した円了は)「山水の美は木曾の勝あり日光の奇ありといえどもこれを熊野の奇勝に比すればはるかにその後に瞠若たるありさまなり……しかるに文人墨客のいまだその勝を天下に紹介せざるは、風景のために不忠の大なるものにあらずしてなんぞや」(12・126)。

『漫遊記』に収められた小旅行記の題名には「遊記」「再遊」「漫遊」「遊行」「遊跡」「遊処」といった「遊」の字を入れた題名が多い。実際、『漫遊記』の旅行スタイルは、題名通り「漫遊」であり、その目的は遊興、観光にあった。「漫遊」は自由な旅行であり、「楽しみ」がある。円了は自由を重んじた。ただ円了の「漫遊」には「学び」と「触れ合い」(=「交遊」)があった。「触れ合い」は人的ネットワークを形成する機縁となる。学生時代、円了は多くの学友と旅し、交流を深めた。後年の巡講、海外視察旅行でも多くの人との交遊があった。「学び」も「触れ合い」も円了にとっては「楽しみ」だった。

2. 2 全国巡回講演旅行記—「館主巡回日記」と『南船北馬集』—

円了はその生涯に3,578日にも及ぶ巡講を行い⁶、その記録を簡潔な日記(旅行記)として公表している。旅行記は、当初、「館主巡回日記」として『哲学館講義録』などに収められていたが、大学を辞してからは『南船北馬集』(全16編)として刊行された⁷。

2. 2. 1 「館主巡回日記」

「館主巡回日記」は、哲学、教育勸話の普及、哲学館創設資金を募るための講演旅行、すなわち第一期巡講(1890年11月2日～1905年8月1日)の記録である。「日記」(=旅行記)には、旅行の日付、天候、訪問地、行程、面会者の氏名が簡潔に記され、目的も明確だった。「明治二十三年十一月五日 雨。……午後、蜂屋師範学校長の依頼に応じ同校へ出頭し、教育将来の方針ならびに哲学館拡張の趣意を演述す」(12・11)。旅行記には巡講の使命感が漲る。講演でお世話になった方々に対する気遣いも滲む。「今回巡回中、各地の有志者より一方ならず周旋尽力にあずかり、いちいちご厚意を謝するはずなるも、ご姓名を失念して意を達するあたわざるものこれあり、また右日記中に記載せざるものおよび記載中順次を失するものこれあり、疎漏の罪、深く謝するところなり」(12・26)。

巡講は多忙を極めたが、円了は行く先々で観光を楽しんだ。というよりも巡講の目的は観光にあったのではないかとさえ思われる。「今度の巡回は文人的漫遊にあらず、保養的旅行にあらず、哲学館および京北中学校拡張の旨趣を報告し広く賛成会員を募集するにあり」(12・107)。ということは、ふだんは漫遊的・保養的旅行が多かったのではないか。能登巡講の折にも、「余は巡回中に別に七不思議および八景と名づくべきものを得たれば、他日の笑い草までに左に掲ぐ」(12・108)として、旅行中の遊興的な見聞の一端を紹介している。ともあれ、巡講の合間、円了は様々な風物を見聞している。

「午前、港内築港の実況を一見」(12・90)、「灯台を一覧」(12・123)、「製塩場を一覧」(12・149)、「午前、女学校、高等小学、尋常中学を参観し、かつ学校において演説をなす」(12・43)。「当日、捕鯨あり……(浜に)出でて鯨魚の解剖を見る……その状、実に一大奇観たり」(12・86)。「高等小学校において演説す……演説後、湯之峰温泉に入浴して帰る。同所には小栗判官および遊行上人の古跡」(12・120)があった。「終日旅亭にありて宇和島行きの船を待つ。当所に温泉あり」(12・36)。温泉に入ったかどうかわからないが、温泉好きの円了の本音が窺われる。

「館主巡回日記」には、「北海道論」(12・79～85)、「九州論」(12・94～100)、「能州巡回報告演説」(12・107～116)、「南紀巡回報告演説」(12・126～136)といった、当該地方一覧の総括的な所感文が付され、率直な感想と所見が記される。「余がここに北海道論と題するは……決して堂々たる大家の高論を義とするにあらず……余が漫遊の紀行について一言せざるを得ず。これすなわち本論の緒言なり」(12・79)。

そこには社会教育者としての円了がいた。

2. 2. 2 『南船北馬集』

『南船北馬集』は、国民道徳の向上、修身教会運動、すなわち第二期巡講（1906年4月2日～1919年3月26日）の旅行記である。「南船北馬」のごとく、多忙な旅行の連続だったが、大学経営からは解放され、気持ちの上では自由な旅行だった。行く先々で様々な人と交流を深め、保養も兼ねた。「午後、二宮駅に至りて乗車し、西行の途に上る。車中、哲学館大学出身鈴木智弁氏に相会す」（12・194）。「香久山より畝傍に出でて乗車し、奈良駅にて上田昊覚氏と袂を分かち。氏は四月九日より四十日間随行せられたり」（12・215）。

巡講は歓迎された。「当地にては特に井上博士招聘会を設けられ、望外の優待歓迎を受く。晚餐には幹部の諸氏と杯膳をとみにす」（14・335）。「応接室に扇風機をかけ、便所に芳香を薫ずる等の用意」（14・129）もあった。マイクのない時代、幾千人の聴衆を前に声は枯れ、「演説を必ずその場内（雨中体操場）においてするも、天井なくして音声を費やすこと多きが……いかんせん連日の講演に音声を濫費したりした（た）めに、声死して音発せざるに苦し」（14・124）んだ。風邪で声が出ないこともあった（15・224、参照）。演説中、聴衆はみな静かだったが、演説の前後一人の拍手するものなく、ときどき念仏の声を聞く（13・459、参照）こともあった。

「館主巡回日記」と比較し、旅行記の分量は圧倒的に多くなる。内容もバラエティに富む。円了は様々な事物に関心を寄せ、それを記録する。そこには強い好奇心と「学び」の姿勢があった。むろん「漫遊」だから「遊び」もあり、「楽しみ」もある。各地の景観美が円了の心を捉えた。名所旧跡もこまめに回り、温泉地では入浴を楽しんだ。心身の疲労や病気を癒す旅行もあった。いずれの旅行でも円了は訪問地の人々との交流に努め、情報を収集した。

『南船北馬集』には、中国、台湾、韓国・朝鮮の巡講旅行記（「満韓紀行」「台湾紀行」「朝鮮巡講日誌」）が含まれる。これらの巡講は3回（1906年10～11月、1911年1～2月、1918年5～7月）に分けて行われた。多忙の中にあっても円了は風光を愛で、見学を行い、見聞を深めた。鉄道の発達と自動車の普及が効率的な移動を可能にした。円了は内地におけるよりも神社仏閣の参詣を積極的に行っている。交遊も盛んだった。哲学館・東洋大学・京北中学関係者、東本願寺関係者、当地の行政・教育関係者、講演聴衆者との交流、再会者との懐旧談など、円了の交遊の広さと深

さが知られる。

台湾・台北では、忙しい日程の合間、まず台湾神社を参拝、市街一覽、各学校を巡覽、「昼夜とも揮毫に忙殺」（「台湾紀行」p.17）された。台湾神社では「社頭の風光頗る好し」（「台湾紀行」p.16）と思わず足を止めた。一方、台南では、「名所旧蹟多々あれども、時間の許さざる為に、一々巡見する」（「台湾紀行」p.28）ことはかなわなかった⁸。景観美を旅の「楽しみ」とする円了にとって禿山同然の韓国の風景にはがっかりした。「韓国の山には樹なく草なく、赤土を露出す、実に殺風景を極む」（「満韓紀行」pp.64-65）。満州（現中国東北部）では、日露戦争の史跡たる 203 高地を見ようとしたが、雪のため果たせなかった。

「朝鮮巡講日誌」は3編だが、巡講自体は連続して行われた。「午後六時自働(ママ)車にて疾風の如く走り、七里の間を一時間にして忠清南道の首府公州に着す」（「朝鮮巡講第二回[南鮮及東鮮]日誌」p.117）。移動中の景観が疲れを癒した。「野花の媚を呈するを見る」（「朝鮮巡講第三回[北鮮]日誌」p.92）。「台下に漢江を帯び、対岸に田野及山岳を望む所、大に鬱懷を散じ、浩気を養」（「朝鮮巡講第一回[西鮮及中鮮]日誌」p.114）った。「麦酒を傾けて渴を医す」（「朝鮮巡講第二回[南鮮及東鮮]日誌」p.127）こともあった。（南満州）鉄道経営のホテルがあったが、「西洋人に占有せらると聞き、金剛館に泊」（「朝鮮巡講第三回[北鮮]日誌」p.97）った。「温泉浴室」もあり、「頗る安廉」だった。円了は金剛山を絶賛する。「雨を侵して金剛山第一の奇勝たる万物相の探勝に向ふ……耶馬溪などの遠く及ぶ所にあ（ら）ず」（「朝鮮巡講第三回[北鮮]日誌」pp.97-98）。

3. 海外旅行記にみる観光行動

円了は当時としては異例ともいべき生涯に3回の海外視察旅行を行ない、それぞれ3冊の旅行記を出版している。第1回、第2回は欧米中心だったが、第3回は南半球にまで足を延ばした。旅行記には初めて目にする事物や光景に目を奪われる一旅行者としての姿があった。当時の観光事情も垣間見られる。「チューリヒは目下観光の客、四方より雲集し、旅館ほとんど空室なし。晩に至り納涼の客湖畔を徘徊し、橋上の来往織るがごとし」（23・335～336）。

旅行は多くの人との交遊の場でもある。円了はいずれの旅行でも多くの人と交流

を重ね、旧交を温めた。「市川（純一）氏にはさきにインド・ボンベイにおいてはじめて相知り、ここに九年を隔てて、さらに豪州において再会を得たるは奇遇というべし」（23・270）。聖人ゆかりの地を訪ねるのも「楽しみ」の一つだった。ルター、カント、ゲーテ、ミルトン、ニュートン、スペンサーなどの生地、墓所等をこまめに回っている。海外旅行では「何でも見てやろう」という姿勢が随所に見られる。

3. 1 『欧米各国政教日記』

『欧米各国政教日記』（上編：1889年8月、哲学書院）（下編：1889年12月、哲学書院）は、円了の第1回目の海外視察（1888年6月9日～1889年6月28日）旅行記である。本書は、しかし、日付、行程等の記載がなく、いわば西欧事情視察の報告書となっている⁹。題名の通り、もっぱら政治と宗教、教育に関する事項を紹介しているが、「この書、むしろ洋行雑記にして、宗教、風俗のほか種々雑多の事項を混入せざるにあらず」（23・19）と断っている通り、様々な風物の観察・見聞の記録であり、円了の好奇心の旺盛さが知られる。「船インドに着し、その市街、民家、林園等を観察するときは、おのずからわが日本の実況を提出するに至る。これ、その風俗、風景の、両国の間はなほだ相似たるところあるによる」（23・131）。

報告書ともいうべき本旅行記に観光的要素を見出すことは難しいが、帰国時、馬関（下関）の風景に目をやる円了に観光旅行者としての一面を窺うことができる。

「船、玄海を渡りて馬関に近づくに及び……その風景の画図中の山水に類するがごときものを見る……実に日本は天地の公園なり、自然の画図なり」（23・133）。

3. 2 『西航日録』

2度目の海外視察（1902年11月15日～1903年7月27日）の旅行記『西航日録』（1904年1月、鶏声堂）は、「余が欧米漫遊の途中、目に触れ心に感じたることをそのまま記して、哲学館出身者および生徒諸子に報道したるもの」（23・157）だが、旅行記としての面白さ、魅力を十分備えた紀行文となっている¹⁰。

インド・カルカッタでは、「哲学館出身者大宮孝潤氏をその寓居にたずね」（23・168）、一泊、奇遇にも河口慧海と再会した。「同氏の宅において、河口慧海氏に会するを得たるは、奇縁といわざるべからず」（23・168）。3人揃って記念写真も撮った。

しかも、その後、バンキポール（駅）では、「実に奇遇」にも「藤井宣正氏に（も）面会」（23・176）したのであった。

地中海を経て、ロンドンに到着したところで「哲学館事件」の報告を受ける。「去月三十日、東京より飛報あり。曰く、十二月十三日、官報をもって文部省より、本館倫理科講師所用の教科書に関し、教授上不注意のかどありとて、教員認可取り消しの厳命あり云云」（23・188）。この報に接し、円了は「苦にするな荒しの後の日和あり……伐ればなほ太く生ひ立つ桐林」（23・188～189）の句を詠み置き、旅行を続けた。旅行中遭遇した「哲学館事件」は、円了にとっては、むしろこれを外から客観的に観る機会となった。円了は精力的に世界を回る。

「夜に入りてロンドン市に着す（23・186）……ウォータールー古戦場およびオランダ諸都を巡見す（23・208～209）……ライプチヒに至り、塚原、熊谷、藤岡三氏に面会し、清談数時にしてベルリンに帰る（23・211）……ウィッテンベルクに至り、ルターの遺跡および遺物を拝観し、大いに感ずるところあり（23・212）……ドイツ北部の一大都会たるケーニヒスベルクに着し、ここに一泊す。当地は碩学カント先生の郷里なり（23・213）……フランクフルトに降車して、文豪ゲーテ、シラー両翁の遺跡を訪い、ついにここに一泊す（23・218）……早朝フランクフルトを発してスイスに入る（23・218）……スイスの勝を探りてチューリヒに至る。当所に湖水あり。大小の群山これを圍繞し、その風色、実に心目を一洗するに足る」（23・219）。

「哲学館事件」を抱えながらも8ヶ月余にわたる視察を終えて帰国した円了は、旅行中構想していた哲学館の大学認可、修身教会運動を展開していく。さらに大学の開設記念に購入した土地に「四聖堂」（「哲学堂」公園）を建設することも明らかにした¹¹。『西航日録』にみる「触れ合い」「学び」「遊ぶ」視察旅行は、円了にとっては、その後の飛躍に備える契機ともなっていた。

3. 3 『南半球五万哩』

三回目の海外視察（1911年4月1日～1912年1月22日）は、「一日に百六十九マイルずつ」という「電光的旅行」（23・241）だったため、その旅行記『南半球五万哩』（明治45年3月、丙午出版社）は、「精細の観察は到底望むべからず、ただ瞬息の間に余の眼窓に映じたる千態万状を日記体には書きつづりたるもの」（23・241）となった。しかし、のびやかな筆致は大学経営から解放された円了の自由な境地を反

映している。この旅行は南半球の国々（オーストラリア、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、ペルー、メキシコ）の視察に重点が置かれていたが、欧州の国々、特にイギリス、ドイツ、フランスは3回目の訪問となった上、北欧（ノルウェー、スウェーデン、デンマーク）にまで足を延ばし、北極海観光を楽しんだ。赤道も4回通過した。

香港、広東、マニラを経て赤道に近づく。赤道通過は最大関心事だったろう。「朝六時に日昇りて、夕六時に没し、没後ただちに暗黒となる。まことに昼夜平分なり。これ、赤道の近きを知るに足る」(23・256)。「当夕九時、まさしく赤道を經過す。ときに汽笛一声を放ちてこれを報ず。これより船員の妖怪行列ありて、一大喝采を博せり。海上は無月暗黒、ただ中天に点々、四、五の星宿を認むるのみ」(23・257)。

赤道を横切り、オーストラリアに向かった。シドニーでは「犬の背上に銭函を結び付け、無言の動物をして人に代わりて恵金を請わしむるもあり。これ新意匠なり」(23・271)と記し、メルボルンでは「海岸の風景を一望せんと欲し、車行してブライトンビーチおよびサンドリングラムに至る。時すでに冬季にせまり、寒潮岸を洗い、浴客あとを絶ち、埠頭寂寥たり。茶亭に一休し、温湯に一浴して帰」(23・275)だった。

喜望峰を回り、再び赤道を通過、英国に入る。ロンドンでは「客中にわかに思い立ち、北極海観光の一行に加わり、欧州最北地点なるノルウェー・ノールカップにおける夜半の太陽を望見せんことを期し……グリムズビー港に至りて乗船す」(23・314)。そして、日本人としてはおそらく初めて白夜を体験する。「当夜は十二時に至るも太陽地下に入らず、まさしく北天にかかり、徐々として東方に移る。一天片雲なきも、また星光を認めず、全く白昼なり……船客、多く徹夜して太陽を望む。なんとなく奇異の感に打たる。夜半十二時砲火を発し、かつ汽笛を鳴らす。これ、初めて夜半の太陽を見たるを報じ、かつ祝するの意なり」(23・321)。

以上のように、「旅行中の円了の態度は、あくまでも自分の好奇心のありかに忠実で、機会を逃さず珍しい場所に足をのぼし、素直に感動する、だが決して物に執せず、自然にまかせる風が目立つ。ゆく先々で、日本人の代表者とはまめに会い、世話になり、話を楽しみ、無理な孤独感にひたったりはしないのである。あくまでも、たまたまの旅行者、漫遊者という形にはまっぴの行動がほほえましく、日記の記述もさらりとして飾るところがな」¹²。かった

4. 旅行記に見る円了の関心事

旅は好奇心を刺激する。普段見慣れたものでもどことなく目新しく感じられる。円了は好奇心旺盛な人だった。本節は、旅行中、円了が関心をもった事物・事柄を旅行記の中に見ていく。取り上げる項目は、①旅情・詩情と景観美、②風俗・民俗、③月、④温泉保養と健康、である。これらはいずれも円了旅行記に共通して登場する、学生時代から晩年に至るまで、生涯を通じて、旅行中、円了が関心をもった事項である。

4. 1 旅情・詩情と景観美

旅は旅情・詩情を育む。円了はそれを旅行記に記す。「顧テ故郷ヲ望メハ已ニ米山ノ一脈ヲ隔テテ遥ニ雲天ノ外ニアリ遊子始テ他郷ニ入ルノ情ヲナス……今日ハ異郷ノ客トナル心ヲ傷マシム江上ノ客是レ故郷ノ人ニ非ス遊子ノ心中憶フヘシ」（「西京紀行」p.94）。心に留めた風景はこれを漢詩に詠み込む。「西ニ向フ途上五律ヲ得タリ……船中ニアリテ一絶ヲ得タリ」（「西京紀行」p.93）。詩情はもっぱら風物に向いた¹³。そこに旅情を確認する。「去家十日到濃州。滿眼風光動客愁。身在晴天白雲外。山河千里思悠悠」（「西京紀行」p.95）。

旅では自然との出会い、「触れ合い」がある。円了はそれを「楽しみ」とした。「菜花正ニ盛ンニシテ残桃田園ヲ擁シ其趣譬フルニ由ナシ」（「銚子紀行」p.105）。人の心は活物である。様々なものに触れて発し、感じて動く。その機会・効用を与えてくれるのが旅である¹⁴。「旅行して他郷にあそび、名勝の地、山水のうらはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙吝をあらひすすぐ助となれり。是も亦わが徳をすすめ、知をひろむるよすがとなるべし」（貝原益軒『楽訓』卷之上）。旅行は円了を詩人にした。

4. 2 風俗・民俗

旅行記には見聞した各地の風俗・民俗の観察的な印象・所感が記される。国内外各地の見聞はおのずから比較の視座を養う。円了は旅行を通して諸国の地理・人情・物産等に通ずることとなる。それは後年『妖怪学講義』『日本周遊奇談』などに結実

していく。

「松本ハ長野ニ競フ都会ニシテ市街繁盛屋宇梢、雅麗ナリ」（「西京紀行」 p.94）。
（京都は）「都会ノ都会ト云ヘシ……街衢縦横砥ノ如ク矢ノ如シ其風俗ヲ察スルニ言
接巧美動作閑雅実ニ皇都ノ遺風アリ」（「西京紀行」 p.96）。「此辺（房州根本村）土
民ノ言語甚タ野鄙ニシテ都人ニ通ゼザルモノ多シ然シテ人情ニ至リテハ極メテ朴質
ナリ」（「房総漫遊」 p.114）。

比較・観察的な記述は旅行記の随所に見られる。「沖繩県は言語、風俗、人情とも
に今なお他府県と大いに異なるところありて、朝鮮、満州を旅行するがごとき感あ
り……沖繩は従来その国固有の歴史を有したるをもって、忠君愛国の精神において
大いに欠くるところあるがごとく感ぜり」（12・284～286）。

「余、ロンドンに遊ぶこと前後三回なり……その前後を比較するに、多大の相違
あり。第一はロンドンが市外に向かいて膨張し、各方面に人の輻湊する場所を生ぜ
ること、第二は地下鉄道の電氣に變じたること、第三は市街の乗合馬車が多く自動
車となりたること……第十は婦人にして喫煙し、またはパブリックバーに入りて飲
酒するものあること等なり。概して言えば保守的の英国にして、欧州大陸風に漸化
せる傾向あるを見る。あるいはまた、米国風に感染せるところあるがごとし。しか
れども、ロンドンの日就月將の繁栄は、ただ驚くよりほかなし」（23・311～312）。

4. 3 月

円了は観月を趣味とした。旅先でも折に触れて月の様相・形状を記している。「夜
に入れば新月天に懸かる。その形、鎌のごとし」（23・288）。『漫遊記』にも以下の
ような記述があった。「親友四五名ヲ会シテ清宴ヲ開ク時月夜ニ当リ千里雲ナ^マフシテ
長空洗フカ如シ明月林端ニ懸テ樹影蒼然タリ」（「寓居記事」 p.106）。「毎夜書窓ノ月
ヲ玩フ幽趣限りナシ」（「冬夏遊跡」 p.122）。上州（群馬県）を旅した折も「桃野村
字月夜野に入る。地名すこぶる雅なり」（15・220）と感じ入った。

台湾では「たまたま満月に会す、春天洗ふが如く一点の雲影を見ず、異郷にあり
て中秋の月を望む心地し、壯絶又快絶なり」（「台湾紀行」 p.34）と、外地での観月
に満足している。韓国で観た月は趣を異にした。「山白く月も亦白く、別天地の観あ
り」（「満韓紀行」 p.76）。「時に陰曆十三夜にして、夜に入りて月色愈々明かなり、
先きに台州にありて中秋の明月を賞し、今韓国に入りて後の明月を望むも、また因

縁と謂ふべし」(「満韓紀行」 pp.65-66)。

三度目の海外旅行では欧州から南米へ向かった。赤道を越えて南半球に入ると「日月を北天に仰ぐ」(23・357) ようになった。「夜に入れば天涯一片の雲なく、ただ半輪の孤月の高く北天に懸かるを望むのみ。満懐雄壯を覚え、快極まりなし」(23・289)。

「夜に入りて天ようやくはれ、一輪の秋月北天に懸かる。詩思おのずから動」(23・275) き、漢詩を詠んだ。ブエノスアイレスで見た月にはいたく感動した。「夜に入りて天気ことに晴朗、一輪の明月北天に懸かり、清輝客庭に満つ。このときまさしく旧八月十五夜に当たり、南(半)球の春天に三五の明月を仰ぐは、生来未曾有の奇観にして、また一大快事なり」(23・376~377)。

ペルーからメキシコに向かうが、「いまだ赤道をこえざるも、日はすでに南天に入る。しかして月(は)なお北天に」(23・413) あった。「午後六時十分に、太陽は地平線下に入りてその形を失う。ときに、明月さらに東空に懸かる。当夜は満月なり。六時三十分、全く残光を失う。赤道直下なるによる。八時後、雲ことごとく消して、ただ一輪の明月を仰ぐのみ。船客中ドイツ人ウルリヒ氏とともに船橋上に踞し、観月の宴をなして深更に及ぶ。清風おもむろに來たりて、爽快極まりなし」(23・414)。

留意すべきは南半球で見た月の形である。「当夜深更に至り、半輪の月を望むに、わが日本にて望むとはその形を異にし、月球の左半面にあらずして、下半面に光を生ぜるを見る」(23・357~358)。「月を北天に望み、半輪を下辺に生ずるは、やや奇異の感なきあたわず」(23・374)。

月食の記録もあった。「たまたま月食皆既に会す。一天雲なく、午後八時、球面全く黒し。少時ののち明月に復し、清輝天地に満つ」(13・447)。「当夕、旧曆七月十五日に当たり、明月輝を放つ……九時より月食始まり、十時後は八、九分どおり光を失う」(14・166)。日食もあったが寝過ごして観られなかった。「今朝日蝕皆既なるも、臥床中にて見るを得ず」(「朝鮮巡講第一回[西鮮及中鮮]日誌」 p.113)。円了ほど月に関心をもった旅行者はいない。月は円了のもう一つの趣味、漢詩の重要なモチーフとなっていた。

4. 4 温泉保養と健康

円了は若いときから温泉浴を楽しんだ。学生時代は、熱海、箱根の温泉をよく利用した。巡講の疲れも温泉で癒した。旅行記には温泉保養の記事が散見される。「七

月、八月の間、半日の休暇なく、炎暑をおかして巡講を継続したれば、心身ともに疲れて綿のごとくなれり。よって帰宅早々、群馬県の温泉休養を思い立ち」(14・176)、伊香保温泉で休養、「終日横臥、夜に入りて按摩を呼」(14・176)んだ。

「身体休養のため東京を発し、その夕、箱根塔之沢鈴木に一泊し、翌朝、小田原より軽便に駕し、湯河原温泉に入浴す」(15・92)。「南半球周遊の目的を達して帰国し、長途の疲労をいやせんと欲し……豆州熱海に入浴す」(13・323)。「微恙ありて箱根芦之湯および底倉に入浴し、静養」(13・105)。「午前九時、新橋着。午後、東洋大学紀念祝賀会に出席す。その後、腸胃病を発し、箱根温泉湯本福住楼に入浴して、滞留週余に及ぶ」(13・555)。

風邪をひいて巡講を延期したこともある。「八丈島、小笠原島を周遊せんと欲し、すでに旅行の準備をなしたるも、風邪におかされ、やむをえず延期する」(13・117)。「腸胃カタルおよびマラリヤ熱を併発」(12・166)し、講演を中止したこともある。またあるときは「医師を呼びて胸痛の診察を請」(13・43)うた。しかし、概して、円了は、巡講中(=旅行中)は健康に恵まれ、元気だった¹⁵。

「京城四日間の滞在は非常の多忙を極め、演説に応接に揮毫に殆んど寸暇を容れず、身体疲れて綿の如くなりしも、諸氏の助力によりて幸に健在を得たり」(「朝鮮巡講第一回[西鮮及中鮮]日誌」p.107)。「ヘースティングズ滞在一週間にして病氣全快し、いよいよ欧州大陸旅行の途に上る」(23・208)といった具合である。円了は船に強かったが、ただ一度船酔いしそうになったことがある。「海上風つよく波荒く、これに加うるに雨はなはだし。船体の動揺一方ならず、余はじめて船病にかかる心地せり」(23・208)。なお、円了は、一時期、「脳病」(神経衰弱)を煩っていたが、巡講によりこれを快癒させている。「近ごろは地方旅行のおかげにて、神経衰弱の方は全快した」(13・489)。

生涯、こよなく旅を愛し、旅を続けた円了だったが、1919年(大正8)6月5日、中国・大連で講演中倒れ、翌6日午前2時40分、逝去した。旅に病んでの客死は、あるいは本望だったかもしれない。生前、次のような詩句を遺していた。「南船北馬送生涯……」(15・92)。

5. むすび

以上、円了旅行記から円了の観光行動を考察した。その結果、旅行記にみる巡講、

海外視察旅行は、いずれも「触れ合い」「学び」「遊ぶ」という観光の3要素を備えた「兼観光」だった。否、むしろ「観光旅行」そのものだったとあってよい。

円了の旅行の基本スタイルはあくまでも自由な旅行、すなわち「漫遊」にある。生涯官途に就かなかつた円了は何よりも自由な生き方、自由な旅行をモットーとした。ただそこには常に「学び」があつた（また「遊び」もあつた）。そして旅行の最大の「楽しみ」を山紫水明に措いた。円了は行く先々で美しい自然と「触れ合い」、風光を愛でた。同時に訪問地の民俗・風俗の情報収集に努め、著作に著わした。旅行記には鋭い文明批評がさりげなく織り込まれている。また旅先での交遊を通して多彩な人的ネットワークを形成した。行く先々で多くの人と交流、「触れ合い」を重ねた。これもまた「楽しみ」となった。

このような旅行によって円了は広い視野と相対的なものの見方、考え方を身につけた。それは円了の比較文化・文明論、さらには思想形成にも影響を与えている。この点について、本論は深く立ち入ることはできなかつたが、好奇心旺盛な円了の「学び」の姿勢に注目したい。円了旅行記の分量・情報は膨大な量に上る。旅行中、円了が関心をもつた事物・事柄も多岐に渡る。それらはいずれも円了の人と思想を知る上で多くの示唆を与えてくれる。本論で取り上げたものはその一部にすぎない。他にも興味ある多くの事例がある。それらの分析・考察は今後の課題としたい。

参考文献

市川義則「井上円了の洋行と日本人の海外移住—民衆教育者としての一側面—」（『国際井上円了研究』第1号、国際井上円了学会、2013年）、pp.158-177.

井上甫水「漫遊記第一編・第二編」（『井上円了センター年報』Vol.1、東洋大学井上円了記念学術センター、1992年）、pp.93-129.

井上円了『井上円了選集』第12巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1997年。

井上円了『井上円了選集』第13巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1997年。

井上円了『井上円了選集』第14巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年。

井上円了『井上円了選集』第15巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年。

井上円了『井上円了選集』第23巻、東洋大学井上円了記念学術センター、2003年。

岡本伸之編『観光学入門』有斐閣、2001年。

白川部達夫『井上円了の全国巡講—旅する創立者 国内編—』東洋大学史ブックレット

- 7、東洋大学、2014年。
- 瀧田夏樹「解題—井上円了の世界旅行記」(井上円了『井上円了選集』第23巻、東洋大学井上円了記念学術センター、2003年)、pp.473-497.
- 竹村牧男『井上円了の生涯』東洋大学史ブックレット1、東洋大学、2012年。
- 新田幸治「解説—井上円了の漢詩について」(井上円了『井上円了選集』第15巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年)、pp.423-441.
- 新田幸治「井上円了の漢詩について」(『東洋大学中国哲学文学科紀要』第7号、東洋大学文学部、1999年)、pp.1-18.
- 新田幸治・長谷川潤治・中村聡編訳『甫水井上円了漢詩集—「襲常詩稿」「詩冊」「屈蟠詩集」訳注—』三文舎、2008年。
- 日本国際観光学会監修・香川眞編『観光学大事典』木楽舎、2007年。
- 野間信幸「井上円了の『台湾紀行』」(『東洋大学中国哲学文学科紀要』第7号、東洋大学文学部、1999年)、pp.19-41.
- 堀雅通「井上円了の全国巡回講演、海外視察旅行にみる鉄道利用について」(『鉄道史学会2014年全国大会自由論題報告要旨』鉄道史学会、2014年)、pp.1-18.
- 堀雅通「井上円了の観光行動について」(『国際井上円了学会第4回学術大会予稿集』国際井上円了学会、2015年)、pp.9-10(及び当日「配布資料」pp.1-6.)
- 三浦節夫・豊田徳子「井上甫水『漫遊記について』」(『井上円了センター年報』Vol.1、東洋大学井上円了記念学術センター、1992年)、pp.130-131.
- 三浦節夫「解説—井上円了の全国巡講」(井上円了『井上円了選集』第15巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年)、pp.443-499.
- 三浦節夫「解説—井上円了と世界」(井上円了『井上円了選集』第23巻、東洋大学井上円了記念学術センター、2003年)、pp.498-519.
- 三浦節夫『人間・井上円了—エピソードから浮かびあがる創立者の素顔—』東洋大学史ブックレット4、東洋大学、2012年。
- 三浦節夫「井上円了の全国巡講データベース」(『井上円了センター年報』第22号、東洋大学井上円了記念学術センター、2013年a)、pp.37-160.
- 三浦節夫「井上円了の世界旅行」(『国際井上円了研究』第1号、国際井上円了学会、2013年b)、pp.137-142.
- 三木清『人生論ノート』新潮社(新潮文庫)、1985年。
- 八木清治『旅と交遊の江戸思想』花林書房、2006年。

渡辺章悟『井上円了の世界旅行―旅する創立者 海外編―』東洋大学史ブックレット 8、東洋大学、2014年。

注

*本研究に際し、国際井上円了学会会長・三浦節夫東洋大学教授に貴重なご教示を賜りました。ここに記して謝意を表します。

¹ 「旅」あるいは「旅行」とは、人が自分の家を離れて、一時他の土地、あるいは遠くへ行くことをいう。また「観光」とは、(人が)「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とする」(1995年観光政策審議会答申)。すなわち、観光は、「触れ合い」「学び」「遊ぶ」という3つの要素からなっている。このような観光の要素を備えた旅行として「漫遊」「遊観」「遊覧」「交遊」などがある。こうした旅行にはいずれも「楽しみ」がある。本論は「観光」を「楽しみのための旅行」(travelling for pleasure)と定義する。「観光」は「観光旅行」のことであり、「観光行動」と言い換えることもできる。なお「兼観光」とは「楽しみを兼ねる商用旅行」のことであり、また「商用旅行」は「仕事を目的とする旅行」(travelling for business)をいう。岡本(2001)pp.2-5、参照。

² 「円了旅行記」からの引用については以下の通りとする。

① 井上円了選集からの引用は巻数・頁数で本文中に示す。

② 『漫遊記』からの引用はそこに所収された小旅行記名と以下の文献の頁数で本文中に示す。

井上甫水「漫遊記第一編・第二編」(『井上円了センター年報』Vol.1、東洋大学井上円了記念学術センター、1992年)、pp.93-129。

③ 井上円了選集に所収されていない『南船北馬集』中の「満韓紀行」「台湾紀行」「朝鮮巡講日誌」からの引用は当該紀行の題名と初出本の頁数で本文中に示す。すなわち「満韓紀行」は『南船北馬集』第一編(1908年12月、修身教会拡張事務所)、「台湾紀行」は『南船北馬集』第六編(1912年4月、修身教会拡張事務所)、「朝鮮巡講第一回(西鮮及中鮮)日誌」と「朝鮮巡講第二回(南鮮及東鮮)日誌」は『南船北馬集』第十五編(1918年11月、国民道德普及会)、「朝鮮巡講第三回(北鮮)日誌」は『南船北馬集』第十六編(1918年、遺稿)からの引用頁数とする。

³ 「甫水」は号である。『漫遊記』の原本は手書きのもので、かつ著者自身の独特の字の

癖が見られ、略字、俗字等も多く使われている。こうした『漫遊記』の書誌については、三浦・豊田(1992)を参照されたい。

⁴ 「漫遊」とはあてもなく心のままあちこちの土地を遊び歩くことをいう。束縛のない自由気ままな旅行である。気の向くまま諸方を回って旅することから享樂的な意味合いを持つ。明治時代は *tourist* の訳語として「漫遊外人」「観光外人」が当てられた。*tourism* の訳語に「漫遊」が当てられたこともあるが、「観光」が一般的となった。すなわち「漫遊」は「観光」といえる。日本国際観光学会(2007)p.18、参照。

⁵ 学生時代の円了の漢詩集として『襲常詩稿』『詩冊』『屈蠖詩集』がある。新田(1998)pp.423-441、新田(1999)pp.1-18、新田・長谷川・中村(2008)、参照。

⁶ 三浦(2013a)p.37、参照。

⁷ 第16編は遺稿集である。

⁸ 「台湾紀行」については、野間(1999)を参照されたい。

⁹ 瀧田(2003)pp.475-476、参照。

¹⁰ 瀧田(2003)p.479、参照。

¹¹ 三浦(2003)pp.514-515、三浦(2013b)p.140、市川(2013)p.168、参照。

¹² 瀧田(2003)p.490、引用。

¹³ 「西京紀行」に関する漢詩は『屈蠖詩集』に収められている。『屈蠖詩集』は『漫遊記』執筆の時期と重なる。新田(1998)pp.423-441、新田(1999)pp.1-18、新田・長谷川・中村(2008)、参照。

¹⁴ 八木(2006)p.38、p.47、注4、p.48、注21、参照。

¹⁵ 蛇足ながら円了は歯が弱く、痔を患っていた。「腰掛けのなきには、痔持ちの拙者は閉口した……肉はあまり大切ににて、拙者のごとき歯の弱いものには閉口であった」(23・470)。なお円了は裸眼で月や風景を鑑賞していたから視力はかなり良かったものと思われる。

(堀雅通：東洋大学国際地域学部国際観光学科教授)